



見守りとサポートがあれば、自分らしい住まい方はもっと広がる 高齢者施設の現場から

高齢者施設を運営している人は、現在の施設のあり方をどう認識しているのか。基本的な制度設計が大きな問題となっている介護保険制度について、あるいは福祉の現場の労働力不足について何を考えているのだろうか。終の棲家を考える時、希望はどこにあるのか。

神奈川県平塚市に、見守りとサポートが必要な人のための賃貸住宅「サポートハウス和」を開いている、社会福祉法人いきいき福祉会の小川泰子さんに話を聞いた。

社会福祉法人いきいき福祉会理事長 小川 泰子 Yasuko OGAWA



生活クラブ生協神奈川副理事長を経て、特別養護老人ホームラポール藤沢施設長、2003年厚生労働省社会保障審議会介護保険部会臨時委員等を務める。共著『このまちで、ともに暮らそうー新たなセーフティネットづくりをめざして』（筒井書房2009）他。

高齢者施設は、あまりに選択肢が少ない

— 2003年9月に「サポートハウス和」^{（なごみ）}（54ページ参照）を開設されましたが、その理由は何でしょうか。

私が特別養護老人ホーム（114ページ参照）の「ラポール藤沢」の施設長をしていた頃、まだ介護保険制度が始まって間もない時期でした。ラポール藤沢では通所介護（デイサービス）を提供していますが、デイの利用者でいつも粹に着物を着て来る女性がいました。ところが、その方のそばに行くといつも尿臭がするので「変だな」と思い、デイサービスの職員にその方の事情を尋ねました。その職員は、「デイサービスの送迎でアパートへ伺ったら、その方の部屋は荒れた状態で、家族はいるけれどあまり行き来していません。大家さんは一刻も早く退去してもらいたいと思っている。もしも火事のようなことがあったら大変だと思われるのでしよう」と言うのです。

いまに思えば、その方には認知症の症状が出ていたと思いますが、シャツとした着物の印象が強い方だっただけに大変なショックを受けました。すると、その話をした職員から、「デイの利用者の中には、意外とそんな人が多いんです。待機で特養には入れない。高額な有料老人ホーム（117ページ参照）にもとても行けない。行くところがないから、家族に虐待されても同居のままか、一人で住むしかない人がいるんです」と言われてしま